

書評 1

今村仁司『労働のオントロジー—フランス現代思想の底流』（勁草書房）

『仕事』（弘文堂）

最近「障害者と労働」というテーマから、「労働」概念の再把握の必要に迫られて、以前から気にしつつうっちゃってた本を購入し読みました。「うっちゃってた」というのは、今村さんの『暴力のオントロジー』と『排除の構造』という本を、差別を根源的にとらえ返す作業として読み、彼は暴力と差別の物神化に陥っている（差別を自然的なこととしてとらえる誤謬に陥っている）との批判的観点を抱いた故です。それでも、その内もう一度ちゃんと読み直さなければならないという想いはありました。というのは、差別を根源的にとらえ返そうとする数少ない論者の一人である柴田篤弘さんの『反差別論』や山崎カヲルさんの反差別論が、反差別論になりえていないという批判をしつつ、彼らの論拠と今村さんの論が繋がっていて、これらの論をちゃんと批判しきらねばならない想いを抱いた故です。

同時に、今村さんは、私が認識論的に色々吸収しようとしてきた故廣松渉さんと、思想的に色々触発しあっていた人でもありました。

そのような交錯した想いと出会いの中での、今回のこの二冊の本との出会いです。

◎『労働のオントロジー—フランス現代思想の底流』（勁草書房）

この本の最初の部分は（全体の3分の2位を占めるのですが）、副題のフランス現代思想をテーマにしています。内容は、マルクスが落としている課題をとりあげて展開しようとした3人の思想家（アルチュセール、カストリアディス、アンリ）についての論述です。もっとも厳密に言えば、マルクスを受け継ごうとした人たちが作り上げたマルクス主義が落としている（歪曲してしまった）課題で、そのことを独自の展開しようとした思想家への論評です。しかし、マルクス自身は十分にとりあげきれてはいないけれど、この論者たちのマルクス批判に反批判しうる内容はマルクスの中に既にあるのではないかという想いがあります。これは著者—今村さんも指摘しています。さて、ここから今村さんの中では、「労働」ということつながっていきます。だが、ここでは、彼の「労働」論はまだ未整理な部分がかかなりとらえられます。これを「労働」の歴史性からとらえ返す作業として出たのが、『仕事』です。

◎『仕事』（弘文堂）

これは、「労働」の歴史性から「労働」をとらえ返す作業として出た本ですが、「労働」という概念を概略的にまとめるには、この本一冊で足りる、概略的には、もうこれで十分だと言える位の代物です。もっと前に読んでおくべきだったと後悔しています。彼の「暴力論」で抱いた先入観で、読み落としたことが返す返す残念です。ただ、彼の「暴力論」とこの「仕事論」がどう結びつくか分かりません。筆者の他の著作を読み込んでいくしかその理解の途はないのでしょうか、おそらくこの断絶はぬぐいようがないと感じています。「労働」に関しては、後、フェミニズムの観点から「家事（労働）」の問題を織り込み、障

害者の観点から、分業の問題とりわけ自己決定を他にゆだねるという構造になっている分業の問題と、身辺自立と言われている概念でくくられる活動が労働と分離する（正確には三つの分離—労働と家事と個人的営為）ところを押さえ、そこから「労働」を探っていく作業で、「労働」論を補強すると、だいたいの「労働」論の輪郭が押さえられると想っています。そういう中から、将来の「労働」のゆくえということも出てくるのではとも想ったりしています。勿論、「将来」の像を描くことの限界と問題点を押さえた上での話です。ただ、分業が差別の根源と発生に密接な繋がりのあるところで、分業の止揚の中身を押さえる作業としては、このことをなしえねばならない課題としてあるのではないのでしょうか

「労働」ということを考える時、是非読んで貰いたい本です。